

メディアコントロールに抗し、多様性をマジに考える —トランプの出現、大連訪問そして教育の行方—

善元

トランプの予感 アメリカ

アメリカ大統領選については、アメリカ在住の友人からの報告（以前に日韓合同授業研究会のメンバーに公開）を受けていた。巨額な資金提供を国際的に設けグローバル化を推し進めるヒラリーと実業家トランプの対決、それはマスメディアでは人権派ヒラリーVS 民族差別主義者トランプという構図が築かれてしまった。日本の世論では「人権派のヒラリーVS 悪魔のトランプ」とTVメディアで見ている非常にわかりやすい。

しかしその構図と現実とのギャップはなかったのだろうか。数週間前からアメリカの世論支持率はヒラリー55%、トランプ45%の差で投票直前には差が縮まり5%を切ったとの報道。結果はトランプの当選、アメリカの有力新聞紙は直ちに分析が見誤っていたことを反省し、どこで見誤ったか検証し始めた。しかし日本のテレビメディアはその反省がないまま、当初の方向は変わらず「人権派のヒラリーVS 悪魔のトランプ」の路線であったように見える。しかしトランプは単なる排外主義的な面だけでなく、授業料値上げで苦しむ学生、グローバル化で国内生産が落ち込み職を失った労働者にも支持があったということが分かってきた。

アメリカはアメリカ人の国民利益を第一に考える。これがトランプの考え方。では日本はどうか。「日本の国防は日本がやるべきだ。」と言う。ではこのような考えで日本は誰が喜んだか、右翼勢力であろうか。やるならやってみたらどうだろうか。巨額に急増する防衛費を日本国民は支持するであろうか。改めて日本の外交政策が問われてくるのではないだろうか。アジアの平和は従来の日米安保だけでなく、全方位外交で近隣諸国と友好的な関係を築くという選択も出てくることも考えられる。今日本人が国際関係の再構築を始める可能性もあるのではないだろうか。

旅順刑務所を訪れて 中国

目次

メディアコントロールに抗し、多様性をマジに考える	1
初めての共和国訪問を終えて	5
水曜集会に行ってきました	9
犬肉におもう	11
短信	12



今年9月、中国東北地方訪問した。日本語学級で学んでいた八木功（82歳）親子、元日本語の教師、新聞記者の6名である。旅順刑務所は、1902年にロシア帝国が建設し、1907年に大日本帝国が拡張して「旅順刑務所」と呼ばれた。1945年ソ連軍が旅順に入った後、解体されたが、1971年7月に再建され、「旅順日露監獄旧址（旅順日俄監獄旧址）」として陳列館となった。

旅順刑務所では主にその時代に満州と朝鮮の反日人物の他、ソ連やエジプト、日本国内の反戦的な人物も拘束されていた。中国側主張では1906年から1936年間に累計2万人余りが拘束され、1942年から1945年8月の間には約700名が殺害。253の牢獄、4の地下牢、18の病人用獄舎を拡張し、『関東庁監獄』『旅順刑務所』として運営、犯罪人や中国、満州、朝鮮などの反日抵抗者を収監した。中国政府は旅順を軍事機密との理由で外国人を制限していたが、2009年開放した。

安重根の足跡を訪ねて

ここは巨大な監獄跡で周囲は高さ4mの塀で囲われている。安重根は144日にわたって収監され、最後は『国事犯』としてこの地で絞首刑された。日本の新聞が犯人を安應七（安重根の本名）とするのは詳報が入った11月2日前後、これが安重根に代るのは予審が始まってからであった。旅順での裁判は1909年11月13日（伊藤博文の葬儀から9日後）、11月16日に結審し重罪公判に移された。第1回公判は1910年2月7日で、5回目の公判の最終弁論で、公判開始から一週間後に判決の言い渡しとなった。

安は下記のような伊藤博文を暗殺した15の理由を列挙した。この有名な15条は明治42年当時の新聞で広く日本や世界に公表された。

1. 今ヨリ十年バカリ前、伊藤サンノ指揮ニテ韓国王妃ヲ殺害シマシタ。
2. 今ヨリ五年前、伊藤サンハ兵力ヲ以ッテ五カ条ノ条約ヲ締結セラレマシタガ、ソレハミナ韓国ニトリテハ非常ナル不利益ノ箇条デアリマス。
3. 今ヨリ三年前、伊藤サンガ締結セラレマシタ十二ヶ条ノ条約ハ、イズレモ韓国ニトリ軍隊上非常ナル不利益ノ事柄デアリマシタ。
4. 伊藤サンハ強イテ韓国皇帝ノ廃位ヲ図リマシタ。
5. 韓国ノ兵隊ハ伊藤サンノタメニ解散セシメラレマシタ。

6. 条約締結ニツキ、韓国民ガイキドオリ義兵ガ起リマシタガ、ソノ関係上、伊藤サンハ韓国ノ良民ヲ多数殺サセマシタ。
7. 韓国ノ政治、ソノ他ノ権利ヲ奪イマシタ。
8. 韓国ノ学校ニ用イタル良好ナル教科書ヲ伊藤サンノ指示ノモトニ焼却シマシタ。
9. 韓国民ニ新聞ノ購読ヲ禁ジマシタ。
10. ナンラアテルベキ金ナキニモカカワラズ、性質ノヨロシカラザル韓国官吏ニ金ヲ与へ、韓国民ニナンラノ事モ知ラシメズシテ終ニ第一銀行券ヲ発行シテオリマス。
11. 韓国民ノ負担ニ帰スベキ国債二千三百万円ヲ募リ、コレヲ韓国民ニ知ラシメズシテ、ソノ金ハ官吏間ニオイテ勝手ニ処分シタリトモ聞キ、マタ土地ヲ奪リシタメナリトスト聞キマシタ。コレ韓国民ニトリテハ非常ナル不利益ノ事デアリマス。
12. 伊藤サンハ東洋ノ平和ヲ攪乱シマシタ。ソノ訳ト申スハ、日露戦争当時ヨリ、東洋平和維持ナリト言イツツ、韓皇帝ヲ廢シ、当初ノ宣言トハコトゴトク反対ノ結果ヲ見ルニ至リ、韓国民二千万ミナ憤慨シテオリマス。
13. 韓国ノ欲セザルニモカカワラズ、伊藤サンハ韓国保護ニ名ヲ借り、韓国政府ノ一部ノ者ト意思ヲ通ジ、韓国ニ不利益ナル施設ヲ致シテオリマス。
14. 今ヲ去ル四十二年前、現日本皇帝ノ御父君ニ当ラセラル御方ヲ伊藤サンガ失イマシタ。ソノ事ハミナ韓国民ガ知ッテオリマス。
15. 伊藤サンハ、韓国民ガ憤慨シオルニモカカワラズ、日本皇帝ヤ、ソノ他世界各国ニ対シ、韓国ハ無事ナリト言ウテ欺イテオリマス。



伊藤が統監を務めていた1906年から1909年までの約3年の間に、統監府は保護国化を進め、朝鮮の軍隊を解散させて、それに抵抗して蜂起した兵士と民衆を力づくで鎮圧した。一説には、支配に抵抗した朝鮮人が17,000人以上殺害され、特に暗殺前年の1908年には11,000人以上が殺害されたとされていることから、その憎むべき統監府の長たる伊藤個人が凶凶であると考えた安の認識は、当時の朝鮮人一般のそれと大差ないものであった。現在の韓国では、統監府に対する反対運動は“義兵”と見なされ、義兵闘争または抗日義兵戦争と呼ばれ、日本からの独立戦争の始まりと位置づけられている。

*旅順刑務所発行では朝鮮、中国語の「安重根研究」(2007年)を入手した。目次は以下に記す。韓国学校の高校生と11

月読書会をすることにした。

目次

序言

<安重根研究>出版に際して

<安重根研究>出版のために

編者の言葉

第一章 鉄肩担国難 斬鯨敢献身(鉄肩、国難を担い、鯨を斬りて、敢えて身を捧ぐ)

安重根の成長と社会環境が安重根の愛国思想に与えた影響を論じる

附録 安應七歴史 安重根著

第二章 滴血写雄文 東洋叙和平(血を滴らせ、雄文を書き、東洋の和平を叙べる)

王星航

劉恩格

関捷

安重根の「東洋和平論」の中心思想と歴史的位を論じる

附録 安應七所懐 安重根著
人心結合論 安重根著
東洋和平論 安重根著

第三章 豪気挟風雪 筆底唱大風（豪気風雪を挟み、筆底に大風唱える）
安重根の獄中の書道作品の芸術的風格

日本の教育改革とアメリカ

今、私は次期学習指導改定に向けて大いに関心を持たざるを得ない。それは日本の教員は全国各地で多くの疑心暗鬼に陥っている。そこで教師に今抱えている事、気になることを聞くと、答えは多様だが、最も多いのは「多忙」で、その次がなんと「学力テスト」の向上である。前者は教師の勤務時間の問題、後者は教育行政の問題である。教師の感想は授業より「学力テスト」が気になり、このことが教師の心身をむしばんでいる。教師は本当に疲れているのを実感せざるを得ない。学力テストに多くの教師が試験の点数向上に勢力を費やされている感がある。これについては多くの論議があるがPISAの学力テストとの関係を明らかにしたい。

かつて点数だけで子どもの学力を図ることはできない、「何をどう学ぶか」が教育で大きな課題であると考えてきた。そのような経緯もあり、全国学力テストは1960年代にも行われたが、学校や地域間の競争が過熱し1964年に中止した。しかし文部科学省は2007年、43年ぶりに全員調査を復活させたのである。

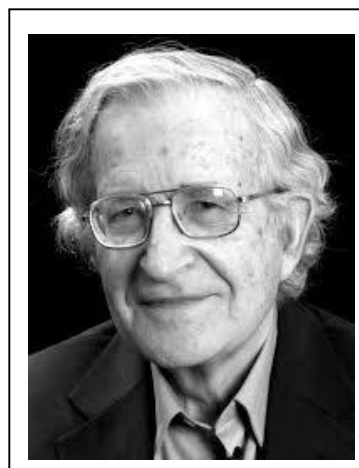
チョムスキーからの警告

そして今回私が強調したいのはメディアコントロールである。
2014年5月31日 東京新聞にはこのような記事があった。

インターネット上に公開された、学習到達度調査を批判する文書
国際学力調査PISA 世界の教員ら「偏っている」

経済協力開発機構（OECD）が十五歳を対象に実施している学習到達度調査（PISA）の在り方について、米国を中心とした世界の教育学者らが「教育の伝統や文化が持つ多様性を、偏った尺度で測定している」と批判する文書をインターネット上に公開し、賛同者の署名が広がっていることが三十日、関係者への取材で分かった。署名した学者や教育関係者は同日現在で、世界的に著名な米言語学者ノーム・チョムスキー氏ら千六百人超。「知識を日常生活に応用して考える力を測る」として国・地域の成績や順位が注目されるPISAの在り方に一石を投じそうだ。」

チョムスキーは、アメリカは「専門知識を持つ特別階級」がメディアを使い、大衆を誘導し民主主義の「合意のでっちあげ」と述べている。具体例は米国の戦争だ。米政府によるプロパガンダにあっては、ある時は深刻な人権侵害と脅威を理由に独裁者を倒す侵略戦争が正当化され、またある時は友邦国で大量虐殺の事実があってもこれを大衆に知らしめない、とのダブルスタンダードがあるという。現代アメリカの悩める問題であり、残念ながら現代日本の抱える根本的な問題である。それにしてもアメリカに追従する日本、ことは深刻である。果たして「トランプ現象」は日本のカンフル剤になるであろうか。



初めての共和国訪問を終えて

酒井

母の訪朝から5年経った今年の夏、娘の私も訪朝のチャンスを得た。5年前の母と同様、私も日朝友好連帯埼玉県民会議の代表団として同行させていただいた。5年前、母から共和国へ行くと聞いて「ちゃんと帰って来られるのか？」と少し不安になったのを覚えている。当時は、浪人生活中でまだ朝鮮語の勉強を始めてもいなかったのも、あまり共和国に関心を持っていなかった。しかし、大学入学後、朝鮮大学校での交流や韓国への留学を通して、私の共和国への関心は一気に高まった。私にとって初めて共和国が身近な存在だと感じられたのは、朝鮮大学校へのフィールドワークだったと思う。校舎に“우리 인민의 위대한 수령 김일성대원수 만세”(私たち人民の偉大なる首領金日成大元帥万歳)と掲げられてあるのを見て、少し身構えたのを覚えている。しかし、そこに通う学生たちは(こんな言い方するのは大変失礼ではあるが)自分たちと同じような若者たちだった。在日朝鮮人も祖国の監視下に置かれているのかな、と勝手に思い込んでいたので、彼らが普通にFacebookなどを自由に使って、しかも祖国の様子なども投稿していたのには非常に驚いた。こんな経緯があって、韓国で韓国人の視点から共和国のことについて学んでみたいと思うようになった。そこで留学中、共和国について授業(韓国では북한학(北韓学)という学問分野がある)や市民講座に参加した。やはり外国語で、ほぼ全く知らない国について学ぶのは難しかったものの、共和国に関心を持ち、統一を待ち望んでいる韓国人たちと交流できたのは収穫だった。その時会った韓国人から、「自分と違って日本人だから共和国に行けるからうらやましい。ぜひ行ってみなよ。」と言われたのは今でも記憶に残っている。その言葉を聞いて、確かなかなか見えてこない人々の生活を見て、朝鮮語で話してみたいという思いが芽生えてきたのだった。そして、今夏、日朝友好連帯埼玉県民会議から訪朝のお誘いの連絡が来たので、学生生活最後の今しか行けないかも、と思い訪朝を決意した。



今回の旅程は8月19日から26日。ご存知の通り日本と共和国には国交がない。そのため、中国の北京の共和国大使館でビザを受け取るため北京で一泊してから共和国へ向かう必要がある。大使館での待ち時間は不安でドキドキだった。なぜなら、自分のパスポートには留学の際に韓国大使館に申請した学生ビザが押されているからだ。南にも長く滞在していて危険人物扱いされるのではないかと不安になっていたのである。ビザを待っていると、突然係員から“*She is not approved.*”という言葉が

発せられた時は心臓が止まるかと思った。韓国の学生ビザもあるし、*She* って…もしかして私

Pa

…?!?!と思った。しかし、様子を見てみると、どうやら She とは私たちと同じ時間にビザをもらいに来ていたほかの訪朝団の女性だということが分かった。その女性もまさかビザが下りないと夢にも思っておらずだいぶ衝撃を受けていた。(結局事務的なミスとのことで、その女性は無事に入国できたのでご心配なく。) こうして、私は入国する前からハラハラドキドキさせられたのだ。

平壤には8月20日から6日間滞在した。そのうち丸一日使って観光できたのは実質4日間だった。代表団での訪朝ということで、板門店、万寿台、金日成の生家、主体思想塔といった観光名所の他にも、協同農場の見学や未来科学者通り住宅参観、科学技術殿堂、食品工場など、盛りだくさんな旅となった。

平壤空港に到着し、ドキドキの入国審査がついにやってきた。共和国で最初に会話をしたのは入国審査官だった。共和国の地に足を踏み入れて最初の会話だったからか、この時のやり取りが忘れられない。最初は、入国の目的など、入国審査の際によくされる質問を朝鮮語でされた。日本人の私が朝鮮語で淡々と答えるので、入国審査官は私に興味をもってくれたようで、どうして朝鮮語ができるのか、朝鮮語の勉強を始めた理由はなんなのか、など入国審査に関係のない個人的な質問までしてきたのだった。会話の最中に見せてくれた彼のスマイルと、口をあまり動かさない早口な朝鮮語がとても印象的だった。(滞在中、韓国人の早口韓国語とはまた違う早口朝鮮語を何度も耳にし、自分のリスニング力不足を痛感。)

入国審査に続く手荷物検査でも係の軍人と手荷物に全く関係のない話をした。最初は、先ほどの入国審査の時と同様なやり取りだった。しかし、今度は韓国に何度行ったことがあるのか、まで聞かれた。共和国の人々が南の韓国についてどう考えているのか全く分からなかった私は、警戒してしまい思わず1回だと嘘をついてしまったのだった。しかし、そのあと話の流れで、진짜요? (「ほんとですか?」) は韓国で使うという話をする、なんだか興味深そうなうれしそうな顔をしていたので、嘘つくまでもなかったのかな、と少し反省した。

空港でのやりとりにすでに興奮してしまっていたが、平壤市内に入るとさらに胸が高鳴った。以前、韓国の展望台から目にした共和国の姿は農地が広がる平らな土地だったので、高層ビルが立ち並ぶ市内を車がたくさん走り、女性が鮮やかな色の日傘をさして歩いているような平壤の様子は私にとってすべて新鮮なものだった。しかし残念ながら、華やかな町並みは首都の平壤に限定されるものようだ。開城にも足を運んだが、首都の平壤とは町並みがだいぶ異なり、人々のファッションや道路の整備状況も違っていた。ちょうど開城を訪れた際、道路工事のため車での移動は困難ということで、街中を歩くという貴重な体験もした。開城は平壤に比べて歴史感の残る静かな街だった。ところどころ舗装されていない道路もあり、平壤並みの高層ビルもなかった。太陽光パネルのついた街灯も見



られたものの、やはり建物自体はずいぶん年季の入っているような印象を受けた。板門店に向かう際に通った統一道路もガタガタで、車酔いがある人にとってはだいぶつらいだろう、と思ってしまうほどであった。

とは言え、首都、地方に問わず人々はみな楽しそうに生活していた、というのが全体的な感想だ。今まで私はメディアの報道を鵜呑みにしていたので、人々には自由がなく、貧困に苦しみ、笑顔の見られない暗い閉鎖的な社会が広がっていると思いついてきた。しかし、実際には人々はおしゃべりしながら明るく雑草抜きや掃除に励んでいたし、地下鉄で見た帰宅途中の学生たちも友人同士でじゃれ合い楽しそうに見えた。動物園でも、とびっきりおしゃれをしたかわいい子供たちをたくさん見かけた。動物園にこんなおしゃれしてこなくても…(笑)と思ってしまったほどだった。二日目に訪れた遊泳場も日本のレインボープールのようで、室内・屋外の両方を兼ね備えた大きな施設で、家族連れが多く見られた。私が見た人々はみな楽しそうで、下ばかりを向いて生活しているような暗い印象は受けなかった。(あくまでも私が実際にみた範囲での話で実際のところはよくわからないが…)



今回の訪朝を通じて、自分がいかにメディアというバイアスがかかった共和国を見ていたのかと反省させられた。メディアでは拉致問題や核問題、強制収容所などブラックな面ばかりが取り上げられていて、市民の様子も政治体制を批判する材料となるような映し方しかされていない。しかし、実際に街で見た共和国の人々はみな、笑顔も見せるし、朝鮮語が話せる私を純粹に一個人として見てくれた。冒頭で紹介した空港の職員、何度も足を運んでいろんな話をしたホテルの売店の従業員…短い

間だったが様々な出会いがあった。板門店で案内してくれた軍人は想像以上にフレンドリーで気兼ねなく話しかけてくれ、一緒にセルカまでしてくれたのは忘れられない思い出。軍事境界線付近は、かなり緊張した雰囲気なのかと思いきや、軍人さんとの距離も近いし(代表団だったからかもしれないが)農地でおじいさんが普通に畑仕事をしているのどかな雰囲気を感じ、驚きの連続だった。毎日お世話になった運転手は、私が共和国の運転免許事情について話を持ち出すと、しまいには自分の運転免許証まで見せてくれるという大サービス。こんなにオープンでよいものか、と驚いてしまうほどだった。どの出会いにおいても、みな温かい心を持って私に接してくれたのは一生忘れられない大切な思い出。留学を経て朝鮮語をある程度話せる状態での訪朝だったからこそ、自ら現地の方々と直接会話をすることができたし、共和国の人々の人間性に触れられたという意味ではとても充実した旅になった。

また、南の韓国での生活も体験した身なので、南北の食事や言語の違いも楽しむことができた。例えば、キムチは韓国よりも少し味が薄いような気がした。冷麺の麺は韓国よりも柔らかく食べ

やすいもので、韓国の冷麺の方が歯ごたえのある感じがした。また、韓国では食べる前にハサミで麺を切って食べるが、そのような文化はなかった。もやしスープの味は、留学中下宿のアジュンマ（おばさん）が作ってくれたスープの味思い出させるようなとても懐かしい味だった。多少の違いはあるものの、南北で大きな違いがあるような感じはしなかった、といったところだろうか。三日目にお腹を下してしまったせいで、旅の後半戦は思うように食事を楽しめなかったのは今でも悔やまれる。（笑）

言語に関しても、食事と同様にところどころ違いが見られる程度だ。韓国ドラマで見る共和国訛ほど激しいものでもなく、私でも普通にコミュニケーションが取れた。例を挙げると、トイレのことを南では화장실（化粧室）、北では 위생실（衛生室）と言う。また、対文協の方に教えていただいたのだが、「安い」は南では싸다 だが、北では눅다と言う。試しにお土産屋で싸다を使ってみたが通じず、눅다を使ったところ通じた。南北のことばの違いを知ったうえで、それを実際に使って会話できたというのも言葉を知っていてこそその体験だった。

繰り返しになるが、今回の旅は平壤の発展ぶりや人々の生活の様子など、視覚的な体験に加え、人びととの直接的なふれあいを通じて、彼らの心の温かみを感じることができた。振り返ってみると、共和国に行けたということよりも、そこに住む人々と直接触れ合えたということに大きな意義があったと思う。彼らの優しさに触れ、いままで見えてこなかった共和国の姿を発見できた気がする。今の日本社会は、共和国の政治体制や指導者にばかりに目を向け、完全に共和国をシャットアウトしているが、自分たちと同じ市民同士が交流することが新たな発見につながり、今の状況の中においてはとても重要なことだと身をもって感じた。



来年からは社会人生活スタートということで、次回いつ行けるのかわからないが、ぜひまた共和国を訪問したいと思う。代表団で一緒に先生方の多くは、すでに何度も訪朝されている方々で、人々のファッションの変化、人口の増加、交通量の増加など、以前と比較しながら旅を楽しんでいて羨ましかった。何度来ても飽きさせない、あたかも虜にさせるような魅力が共和国にはあるんだなあとしみじみ感じた。そんな共和国に一人でも多くの人に関心を持つ

てくれたら嬉しい。だから私は、今回の自分の訪朝経験談が、誰かの共和国への関心のきっかけになれば、という思いをもって周囲の友人には積極的に共和国の話をするようにしている。

かつては何百人という日本人が共和国を訪れていたという。拉致問題発覚を機にその数はだいぶ減っているようだが、今もなお日本と共和国の間ではさまざまな交流がなされているようだ。しかし、交流と言っても、共和国の人々が日本には来られない状況が続いていることからずっと共和国での交流にとどまっているのが現状だ。一刻も早く、人的な相互交流ができるような環境

が整えばと思う。そのためにも、私もなんらかの形で今後も共和国との交流に関わっていききたいと思う。

*****韓国からの便り*****

水曜集会に行ってきました。

尹

そろそろ秋風の季節、昼間とはいえ、戸外で1時間以上立ちっぱなしはきつくなってきました。スピーチが延々とリレーされる中、疲れと寒さでハルモニたちが倒れないかと心配になるほどでした。(通例、12時開始、1時15分から30分に終了しています。今日は1時15分ごろ終わりました。スピーチが多いためです。今日はハルモニが二人参加されました。お一人は車いすでの参加でした。)

12時15分ごろに到着した私は、人が多すぎて中心に近づけないため、マイクもよく聞こえないほどでした。大体200人か、250人か、それが、ほとんどが学生で、平均年齢は、18歳ぐらいではないでしょうか？中学生、高校生が中心で、小学生の姿も見られました。ほとんどは高学年のグループですが、小学1年か2年生くらいの子も数人いて、ほんとかわいくて……。学校の授業のある時間帯ですから、日本ではまず考えられない光景です。

小学校高学年の一団は後から来たのか、歩道にはみ出していますが、デモ規制の警察官も小学生が立っているのを黙認しています。(歩道にはみ出す集会参加者を押し込める「規制ベルト」が車道との間に張られていて、その外側には警察官が規制のために立っていて、立ち止まると注意されます。)立っている警察官は、どんな気持ちで小学生、中学生、高校生のスピーチを聞いているのでしょうか？わりと、優しい顔で立っているのです。聞きながら何を考えているのかと、いつも思います。(沖縄では警察官は「おしごと」とはいえ、横暴な規制をしているのにくらべ……)

参加グループは、紹介されて、スピーチをします。小学校は2校以上から参加、中学校は7校以上から参加、高校はたくさん。そのほかドイツの団体の代表のかた、オーストラリア在住？のかたがたから短いスピーチがありました。(私の韓国語能力不足のため、確認できないところはハナのOGの鈴木裕子さんに補ってもらっています。)

学生たちのスピーチはいつも感動しますが、ある中学2年生の男子のスピーチは衝撃でした。

「ぼくはベトナム大使館に行きました。それは、ベトナム戦争のとき、韓国軍が何をしたのか知りたいからでした。」ちょうど、林立するプラカードを見まわしていて、「過去を隠す民族に未来はない」というような文字が見えて、「韓国だって間違いはいっぱいしてきたんだぞ」と言いかえたいような、ちょっと複雑な気持ちになっていたところだったので、彼のように歴史をきちんと見据えようとする学生たちがいる限り、韓国の未来は明るいと思いました。

また、「ハルモニたちは、過去の証言者であるだけではない。未来の証言者だ」という言葉も心に残りました。

集会に集まった子どもたちが歴史を学ぼうとしていることは、素晴らしいと思います。「歴史から学ぼうとしない民族は滅びる」とは、ドイツのホロコーストの事実を直視しようとしたドイツ人の言葉です。日本はこのような、合理的で賢い選択をなぜできなかったのでしょうか？

小倉紀蔵さんは「敗戦後、確かに(罪の意識を感じて)日本人は喪に服していたが、同時に思

Pa

考停止していた」と言っています。今からでもいいので、考えて、学んでいくべきだと思います。

若者たちが集会に参加する気持ちはハルモニたちを助けたい、という一心なのでしょう。

スピーチの最後には、ハルモニたちをずっと、助けていきたいという呼びかけがされます。

「ハルモニたちに代わって最後まで謝罪を求めていくよ」「ハルモニ、私たちがいるよ」ということばに、慰安婦ハルモニたちは不遇の運命を癒される思いでいることでしょう。

小学生が「故郷の春」を合唱して、ハルモニたちにプレゼントした時は涙が出ました。故郷に帰れないまま死んでいった、たくさんのハルモニたちへの、癒しになったことでしょう。

運動団体にあおられて来ているだけなら、これほどたくさんの子どもたちも来ないだろうし、親たちも許さないでしょう。韓国の教師たちが（主にクリスチャンの）多く立ち上がっているのが特徴とは言えますが。

一方で、素朴な子どもたちを常に国家主義にまとめようとするおじさん（今日はおじさんでしたが、大人は似たり寄ったりです）もいます。

今日のおじさんは「韓国には、ユ・ガンズがたくさんいる。アン・ジュングンがたくさんいる」と言って、面白くない話をしました。この子どもたちを愛国者、とまとめ上げるのは、どうかと思います。やっぱり国と国の対立、愛国と愛国の戦いにしてしまっただけなのではないかと思うのですが、みなさんどうでしょう。

子どもたちはこのおじさんの話は、ありがたとも思わなかったでしょう。あくびをしたり、私語をしたりしていましたから、効き目は薄いとしても、韓国の国家主義をじわじわ刷り込んでいくのは困ったものだと思います。



昨日（10月25日）は「独島の日」で、学校でキャンペーンすることが義務になっていて、子どもたちが領土論争に動員され、日本人との国際結婚のダブルの子どもたちが、「お前のお母さんは日本人だろう」と、心無い嫌がらせ、いじめ攻撃を受けています。（日本人学校への襲撃予告も最近ありました。警備が敷かれ、親の送り迎えが行われ、子どもたちの校外学習は控えられています。なんて馬鹿な連中がいるのでしょうか？ 日本で、朝鮮学校を襲撃するヘイト集団とおなじです。）

慰安婦問題は、国家と国家の対立の枠組みを超えていく上でも大切な問題だと思います。

集会の主催者？から、国際人権規約の話や、女性の人権憲章？が語られ、昨年暮れの合意は台湾や中国、アジア各国の20万人の慰安婦被害者への償いは何一つないじゃないか、日韓の政府のご都合主義だ、という指摘もちゃんとされています。（日本政府は、北に帰った慰安婦被害者も、たくさんいるのに、言及することさえしていません。私は雁部先生が送ってくださったビデオ証言を見て、その時点で60人以上と発表されていますが、なぜ韓国でも日本でもそれが触れられないのか？疑問です。）外交的決着はいったい何を生むのだろうか？と思います。

安倍政権は、「清算」というけど、日本の教育は歴史修正主義に染められている現状を全く糺す気配はない。むしろ、なかったことにしたい、という下心が露骨ですらある。

「本当に、罪の意識があったのなら、その間違いに手を染めた人たちが死に絶える前に、なぜ語ってくれなかったのか、若い世代に過去の間違いを、繰り返さないために、ほんとうに後世の幸せを考えたら、きちんと語り継ぐべきではないでしょうか？口を拭いたまま、血塗られた手を後ろに隠して死にゆくことは、決して幸せではないと思うのだけど。過ちの直し方、こそ、教育の原点だと思うのだけど。

集会が終わって解散した時、高校生に頂戴と頼んでもらったプラカードの文面を紹介します。

「すいませんでした。そして、記憶します。」こんな短い、簡単な言葉を、今まで聞けなかったことが、問題ですね。

こんなこと、子どもに言わせないでほしいな。安倍さんしっかりしてください。

2016年10月26日（水）

犬肉におもう

遠藤

「香肉」「甘い肉」

昨日も近所の韓国食材店で「延辺長寿湯」（中国延辺朝鮮族自治州汪清県百草溝鎮）という真空の犬肉食品を見た。それを見て昨年、吉林市から来日したある生徒が「先生、犬の皮肉と青とうがらしを炒めた料理は最高にうまい」と言っていたのを思い出した。

実は私も1988年8月に吉林省延辺朝鮮族自治州を訪ねたとき、犬肉鍋屋を何軒も見つめた。延吉の市場では毛をむしられた犬が数十頭も横たわっているのを見たし、街中ではトラックの荷台に赤

毛の犬が十数頭載せられているのを見た。見てしまったせいか、誘われたもののついでこの「甘い肉」を口にすることができなかった。おそらく今後も口にすることはあるまい。

ところでワールドカップサッカーを前にして、韓国の「補身湯」がヨーロッパのメディア等から、「残酷な文化」としてたたかれた。

これをどのようにとらえたらよいのだろうか。批判に対して韓国では、食用犬は家畜であり、残酷に当たらないと反論していた。



食文化は地域や民族、宗教ごとに実に多様である。牛を殺して食べるのは残酷ではないのか。

Pa

豚を殺して食べるのは残酷ではないのか等々疑問はいくらでも湧いてくる。また、私たちは動物や植物の命をもらって成り立っていることに改めて気づく。

私は犬肉を食べることができなかったものの、決して犬肉食を「残酷だ」と非難するつもりもない。人それぞれ、民族それぞれであってよいと思うが。

(初出『我が家の味 我が家のキムチ』。2004. 6. 19。翠翔祭参加時のパンフレット)

犬肉後日談

さて、私がついに犬肉を口にしたのは確か2007年の暮れであったように思う。

きっかけは単純、いわばひきずられるままに口に運んだといえる。

所属する会で許さんを新宿区立大久保小学校にお呼びし、「中国延辺朝鮮族の近代教育史」について話していただき、反省会を新大久保駅近くの「金達来」という店で行なったときだ。

「金達来」は中国語の発音で[jindálái]、朝鮮語の진달래[チンダラレ]、すなわち「つつじ」である。「金達来」は中国朝鮮族による料理店である。新大久保や池袋には朝鮮族料理店が何軒かある。

前おきが長くなったが、許さんの案内でこの店に入り、注文もみな許さんが行なった。そのとき私は犬肉鍋をおそるおそる食べた。うまいともまずいともいえない。ただし新潟県塩沢町清水の民宿で食べた熊肉のような強烈な臭みや、羊肉のような独特の香りがなかったことは覚えている。みなで酒を飲みながらだったので食べられたが、一人二人ではきっと口にすることはできなかっただろう。

その後あるとき犬肉について知り合いの韓国人に尋ねたところ、夏ばて防止に良いので食べているという。「え、この美しい女性が」と反応している私は、まさに偏見と思い込みの塊である。きっと、この先、私は二度と犬肉を口にすることはないだろう。犬の姿を頭に浮かべ憐みを持ってしまうからだ。

短信

○ツイッターではヘイトツイートの取り締まりが始まったそうです。ヘイトのない社会が来ますように。

○交流会でお世話になった平形さんから、千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者 追悼・調査委員会会報「いしぶみ」をいただきました。交流会のことを書いてもらいました。

○神奈川で朝鮮人虐殺の聞き書き集を出したところの新聞記事を見て、さっそく送ってもらったところ、代表の山本すみ子さんから手紙を頂き、呉チュンゴン監督から私たちのことを聞いたと書いてありました。

○交流会報告書、もう少しで完成します。
1000円でお分けします。お楽しみに。(F)

ウリ 106 号 2016 年 11 月 23 日
日韓合同授業研究会

事務局連絡先

E-mail larrabee1991@yahoo.co.jp